琉球大学学術リポジトリ

# 留学生の地域語にたいする意識　-沖縄を事例として-



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学法文学部 |
| | 公開日: 2009-05-19 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 副島, 健作, Soejima, Kensaku |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24564/0002004614 |

*Ryudai Review of Euro-American Studies* No. 53, 2009

# 留学生の地域語にたいする意識
## －沖縄を事例として－

副島　健作

## 0．序

語学教育において「方言」または生活語としての地域語は，ことばに「規範」を設定し，そこから逸脱したものは教えないといった，従来の規範主義的な教育の中では，俗語やダイナミックに日々変化する若者ことばと同様，「誤用」とみなされ，教育上何らかの配慮がなされるのが一般的である。

しかし，近年，言語がコミュニケーションの手段であり，道具であるからには，実用性が重んじられ，教授項目である文法は「正確さ重視」から「目的を達成できる」ものへと見直しが必要だという動きも出てきた（野田編 2005)。学習の目的や周囲の環境におうじて，規範通りに正しく使うことより，多少「誤り」があっても，意志を正確に伝えることやその能力を重視したほうがよいという考え方である。言語生活上，地域や世代，場面に応じて適切に言葉を使い分け，違和感なくスムーズにコミュニケーションをとることは，相手との距離を縮め，より心地よい居住環境の構築へとつながると言えるが，そのことは日本語学習者にもあてはまる。

実際，さまざまなコミュニケーション場面には，標準的な日本語を含めたさまざまな日本語が運用されている。学習者が多様化するにつれ，その社会的属性も多様化し，日本語教育機関以外のところでネットワークに進出したりすることが普通になってきている現在，日本語教育にはバラエティに富んだ日本語に対応する能力の指導も求められるようになったと言っても，過言ではない。

本稿は，そうした考え方から地域語教育を重視する立場をとり，その必要性を確かめるための一方策として，沖縄地方を事例に，その地域共通語である「ウチナーヤマトゥグチ（沖縄大和口)」を取り上げ，留学生をとりまく地域語

の使用状況の意識はいかなるものか，日本語学習者は地域語の教育を必要としているか否か，について考察を加えようと思う。

なお，本稿では，地域性を保ちながらも共通語で話そうという意識が加わって，方言とは断定しづらい中間方言，ネオ方言（真田1999: 47），新方言（永田1996: 11）などと呼ばれているものを「地域共通語」または「地域語」と呼ぶ。

## 1．ウチナーヤマトゥグチ

沖縄地方にはウチナーヤマトゥグチと呼ばれる言語がある。「沖縄における沖縄方言から日本語方言への言語転移の過程で，主として，－中略－ 沖縄方言を基に日本語を習得していく段階での干渉（Interference）の現象であり，またそれによってできた言語作品」（屋比久 1987: 122）であり，「話者は標準語をはなそうと志向しているが，標準語が基盤にあって，その干渉をうけてあらわれる言語現象」であって，「発音，文法，語彙のどの側面にも方言の干渉がみられる」（高江洲 1994: 246）言葉である。そのため，「見かけ上はきわめて日本語に似ているとしても，琉球語の特徴をうけつぎ，日本語とはことなる体系をもった，日本語でも琉球語でもない，新しい言語」（かりまた 2006: 56）である。金城・尚（2000）は沖縄の大学生に調査を行い，70項目のうち39項目（55.7%）について半数以上の人が使用を認めたと述べている。この調査からもウチナーヤマトゥグチが地域における意思伝達の手段として生活上広く使用されている現状がわかる。

その一端を紹介すれば，「かさをさす」を「かさをかぶる」，「たばこをすう」を「たばこをふく」，「めがねをかける」を「めがねをはく」，「髪を刈る」を「頭をさる」というようなものである。語形そのものは標準日本語にも存在するものであるが，意味や使い方にずれがあるものが多いのが特徴である。

中でも，「～はず」や「～よう（～ましょう）」は日本語の基礎的な文法項目の１つであり，初級日本語レベルで取り扱われる文法項目となっている重要なものであるが，その意味範疇がずれており，沖縄以外の地域の日本語母語話者でさえ戸惑うことも少なくない。

(1) おじいさん来るはずよ。ちょっと待っとこう。

(2) 先に帰りましょうね。

という例で，(1)はウチナーヤマトゥグチでは「多分来るよ」の意味にしかならず，おじいさんが来る可能性が50％ぐらいで，確信がない場合でも用いる。また，(2)はウチナーヤマトゥグチでは，特に誰かを誘うわけではなく，「先に帰るね」と宣言しているにすぎない。実際発話者は１人で帰ってしまう。

このウチナーヤマトゥグチは地域社会で使われる日本語に適度に方言が入り，地域の共同体を構成する人々が自然に使っている「地域共通語」であり，場面や相手，位相性などによって標準日本語と切り替えて使用されるものである。

留学生にとっては周りで使われていることばが標準日本語なのか地域共通語なのかを区別するのは相当難しい問題であると思われる。学習者の日本語習得はまだ途上にあり，教室で習った日本語と教室外で接する地域語のどちらがいわゆる規範的な「日本語」か，判断することができないからである。

このようなずれに留学生が遭遇した場合，①「誤った日本語」だから，使わない，②「変な（または，おもしろい）日本語だ」と思いつつ，それを日本語の変種の１つとして肯定的に受け止め，必要があれば自ら使用する，③これが「正しい日本語」だと考え，自身の文法規則を修正し，さっそく使ってみる，と対応の仕方が大きく３つに分かれると思われる。

学習者が「多様な」日本語を受け入れ，適切に対応していけるようになることこそ「日本語能力の向上」である，という観点に立てば，②の対応が当を得ていようが，はたして，実際，留学生はどう考え，行動しているのだろうか。

こうした疑問を出発点として，実際に身の回りで使われている日本語，沖縄の地域語としてのウチナーヤマトゥグチについて調査を行った。調査の対象は，沖縄県西原町近辺に在住する留学生である。

調査は「留学生にたいする調査」と「日本人（またはウチナーンチュ（沖縄人））にたいする調査」に分かれる。「留学生にたいする調査」は，留学生をめぐる地域語の実態を明らかにし，地域語教育が必要か否かを確認することを目的としている。主に，留学生がどのようなものを地域語として意識しているか，地域語を知らないことで起こる問題，及び，留学生の地域語への意識などをみ

た。他方，「日本人（またはウチナーンチュ）にたいする調査」は，留学生を取り巻く言語環境を明らかにすることを目的に，留学生がよく接する日本人にたいし，その人たちがどのような場面でどのように地域語を使い，また，使い分けているのかをみた。また，日本人の地域語への意識もみた。

## 2．留学生への調査

まず，留学生にたいして以下の３つの調査を実施した。

① 留学生をめぐる地域語の意識調査

② 共通語ではない，よく聞く語のデータ収集

③ 留学生が耳にし，実際困ったり，コミュニケーション上問題になった地域語の実態調査

調査によっては被調査者の数が多少異なるが，概要を以下にまとめて示す。

調査１　留学生をめぐる地域語の実態と意識にかんする調査

<table>
<tr><td>調査目的</td><td colspan="4">留学生をめぐる地域語の実態を明らかにする</td></tr>
<tr><td rowspan="8">被調査者</td><td colspan="4">琉球大学留学生43名<br>（国籍）韓国10名　タイ６名　ドイツ５名　アメリカ４名<br>台湾４名　中国４名　ボリビア３名　フランス２名<br>イギリス１名　ニューカレドニア１名　ハンガリー１名<br>フィリピン１名　ベトナム１名<br>（年齢）18～25歳<br>（性別）女30名　男13名</td></tr>
<tr><td colspan="2">（沖縄滞在歴）</td><td colspan="2">（日本語学習歴）</td></tr>
<tr><td>１年未満</td><td>24名</td><td>６ヶ月以上１年未満</td><td>１名</td></tr>
<tr><td>１～２年</td><td>13名</td><td>１～２年</td><td>11名</td></tr>
<tr><td>２～３年</td><td>３名</td><td>２～３年</td><td>８名</td></tr>
<tr><td>３～４年</td><td>２名</td><td>３年以上</td><td>23名</td></tr>
<tr><td>４年以上</td><td>１名</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>調査実施</td><td colspan="4">2007年4月23日～6月中旬</td></tr>
<tr><td>調査方法</td><td colspan="4">質問紙を使用したアンケート調査</td></tr>
</table>

## 2．1．留学生の接する地域語

まず，留学生を取り巻く言語環境を明らかにするため，留学生がよく耳にすることばのうち，標準日本語に思えない語がどれくらいあるかを，調べた。

留学生数名に話し合ってもらい，まず，聞いたことがあるウチナーヤマトゥグチを挙げてもらった。次に，それをもとに，調査対象者に「A．聞いたことがあるし，自分でも使う」，「B．よく聞くが，使わない」，「C．たまに聞いたことがあるが，使ったことはない」，「D．まったく聞いたことがないし，使ったこともない」の４つの選択肢から１つ選んでもらい，どのくらいウチナーヤマトゥグチに接しているか，どんなことばをよく耳にし，聞いているか，を調べた。

その結果をまとめたものが以下の表１である[1]。表内にある「使用度」とは，Aは２点，Bは１点，Cは－１点，Dは－２点で合計して出した数値の平均値であり，１点以上であれば，多くの留学生がよく聞いたり，使ったりする表現であると言える。逆に，－２点に近ければ近いほど，ほとんどの留学生が，

表１　留学生がよく耳にするもので共通語に思えない語のリスト

| | ウチナーヤマトゥグチ | 例 | 使用度 |
|---|---|---|---|
| 1 | チャンプルー | 今日はゴーヤー**チャンプルー**が食べたい。それとも，ソーミン**チャンプルー**を食べようかな。(他に：マーミナ**チャンプルー**，ふー**チャンプルー**，野菜**チャンプルー**，etc) | 1.56 |
| 2 | ＊あのさ | **あのさ**，今日英語のテストある？<br>〈呼びかけるときなどに用いる。標準語「あのね」とほぼ同義。〉 | 1.56 |
| 3 | ＊～はず | ・A：今日英語のテストある？<br>　B：たぶん，あさってだった**はず**よ。<br>・絶対，花子は太郎のことが好きだ**はず**。 | 1.49 |
| 4 | ＊来る | A：(電話で)今から**来る**から，外に出て待っててね。<br>B：わかった。 | 1.07 |
| 5 | ウチナーンチュ | A：ヤー，**ウチナーンチュ**か？ナイチャーみたいな話し方だけど。<br>B：うん。**ウチナーンチュ**だよ。 | 0.65 |
| 6 | ～からさぁ | 今日の朝，寝坊して**からさぁ**。やがて遅刻するところだったよ。 | 0.65 |
| 7 | ～さぁね | 明日，英語のテスト**さぁね**。だから，今日の夜一緒に勉強しない？ | 0.44 |
| 8 | しに～ | ・あの子 見て！**しに**かわいい。<br>・今日，**しに**疲れた。<br>〈標準語「とても」とほぼ同義。「デージ，シッタ」と同義。〉 | 0.23 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 9 | だからよ | A：あの子，しにかわいいんじゃない？<br>B：**だからよ**。デージかわいいね。〈同意をあらわすときに用いる。〉 | 0.21 |
| 10 | ナンクルナイサ | A：今日，英語のテストがあるけど，全然勉強してない。やばい。<br>B：**ナンクルナイサ**。 | 0.12 |
| 11 | ～ってば | A：何でこんな機嫌がいいの？<br>B：今日の夜，飲み会がある**ってば**。 | 0.09 |
| 12 | ちゅら | **ちゅら**かーぎーだね。〈直訳：美人だね。〉 | −0.05 |
| 13 | ナイチャー | 今，石垣島は**ナイチャー**がいっぱい移住してるってよ。この間，新聞に書いてあった。 | −0.14 |
| 14 | アガー | **アガー**！机の角に足の指ぶつけた。<br>〈標準語「痛い」とほぼ同義。〉 | −0.30 |
| 15 | ヤー | **ヤー**，明日ヒマ？ヒマなら遊びに行こう。<br>〈標準語「おまえ，あんた」とほぼ同義。〉 | −0.35 |
| 16 | ＊服がせまい | A：ヤー，ちょっと太った？<br>B：だからよ。今まで着てた**服がせまくなってる**ってば。 | −0.44 |
| 17 | ＊傘をかぶる | 雨が降ってるから，濡れないように**傘かぶって**行きなさい。 | −0.47 |
| 18 | ＊じょうとう | この車 しに**上等**！いつ買ったの？ | −0.60 |
| 19 | デージ | **デージ**羨ましい。自分もこんな車欲しいな。<br>〈標準語「とても」とほぼ同義。「しに，シッタ」と同義。〉 | −0.63 |
| 20 | ＊死なす | 買ったばっかりなのに，人の車に傷つけて。ヤー，**死なす**よ。〈標準語「泣かせるぞ」くらいの感じ。〉 | −0.65 |
| 21 | ～よった | ・A：誰がワンの車に傷つけ**よった**か？<br>B：花子がやり**よった**よ。<br>・太郎が花子に「死なすよ」って言い**よった**。<br>〈過去において，自分が知覚したことを伝える形。〉 | −0.70 |
| 22 | ＊チリ | **チリ**箱がいっぱいなったから，**チリ**捨ててきて。<br>〈標準語「ごみ」とほぼ同義。〉 | −0.72 |
| 23 | ワン／ワー | **ワン**の携帯見なかった？〈標準語「俺，私」とほぼ同義。〉 | −0.84 |
| 24 | テーゲー | ・この机**テーゲー**作ったからもう壊れそう。<br>〈標準語「適当に」とほぼ同義。〉<br>・**テーゲー**かわいい。〈直訳：思ったよりもかわいい。〉 | −0.93 |
| 25 | ＊くいしん坊 | 太郎は**くいしん坊**だね。<br>〈「大食いの人」のこと。〉 | −0.95 |
| 26 | カメーカメー | ・（食事を出しながら）ウリ，たくさん**カメーカメー**。<br>・おばーの家に行ったら，**カメーカメー**攻撃にあう。<br>〈「食べて，食べて」と相手に食事を勧めるときに用いる。〉 | −1.00 |
| 27 | シレ | 勉強**しれ**。（命令形） | −1.02 |
| 28 | ＊なんぎ | はぁ，テスト勉強とかデージ**なんぎ**。やりたくないな。 | −1.05 |
| 29 | ～やっさぁー | ・しにチリがいっぱい**やっさぁー**。<br>・今日はしに勉強した**やっさぁー**。<br>〈「～やっさぁー」は「～だ，～である」などとほぼ同義。〉 | −1.07 |
| 30 | ＊布団をかぶる | ちゃんと**布団かぶって**寝なさいよ。 | −1.09 |

聞いたことも使ったこともない表現である。

留学生に挙げてもらった全54語のうち，実際に使ったり，よく聞いたりすると答えたものが多数だったのは「チャンプルー」，「あのさ」，「～はず」，「来る(今から行くよ，の意味で)」の４語のみであった。使ったり，よく聞いたりするという答えが若干多かった「ウチナーンチュ」，「～からさぁ」，「～さぁね」，「しに～」，「だからよ」，「ナンクルナイサ」，「～ってば」の７語を加えても11語にしかすぎない。また，そのうちの「ナンクルナイサ」や「チャンプルー」は日本人が普段の話し言葉では使用しない「お国ことば自慢」のような語であった。このように，琉球大学に在籍している留学生が地域語として意識している語はそれほど多くないという調査結果となった。留学生が自然なウチナーヤマトゥグチに接しても，標準日本語と区別するのは容易ではないということがわかる。

## ２．２．留学生の地域語接触と認識

地域社会に生活し，学習を行っている留学生は，講義や授業が標準日本語に近い形で行われていても，アルバイト先や学内，地域では地域語が使われていると思われる。図１は，留学生の現状認識としてウチナーヤマトゥグチをどん

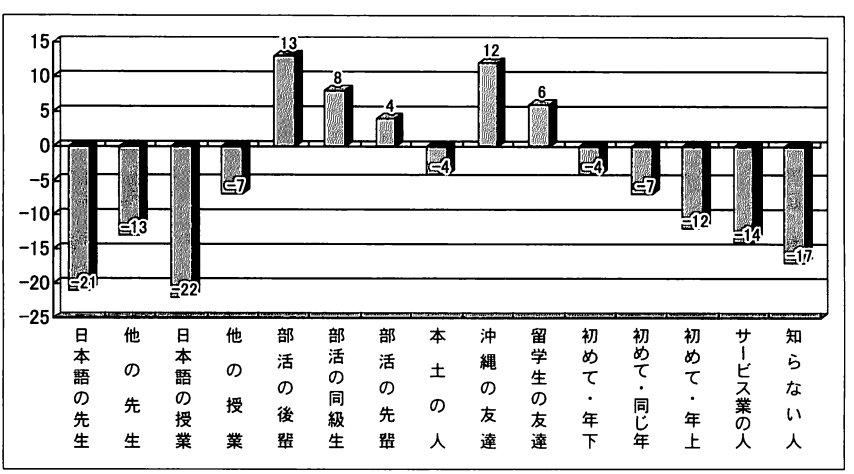


図１　どんな場面でウチナーヤマトゥグチを使うか

な場面で使用しているかを「A．いつも使う」，「B．よく使う」，「C．時々使う」，「D．あまり使わない」，「E．まったく使わない」の５択から選んでもらった結果をまとめたものである。数値は，A＝２点，B＝１点，C＝０点，D＝－１点，E＝－２点で，合計して出した。この結果を見るかぎり，後輩や同級生，沖縄の友達に「使うべき」だと考えられていることがわかる。

また，「ウチナーヤマトゥグチで話しかけられたことがある」と回答した留学生は約７割にもなる（表２）。このように，留学生をとりまく言語状況は，教室では標準日本語を使用しているかもわからないが，地域社会では地域語との接触を余儀なくされ，二重生活を送っているというのが現状であると言える。

表２　ウチナーヤマトゥグチで話しかけられたことがあるか

| 選　択　肢 | 人数（26人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| ある | 18 | 69.2 |
| ない | 8 | 30.8 |

このように普段から接することの多い地域語であるが，留学生はこの状況をどのように認識しているのだろうか。次の調査結果をご覧いただきたい。留学生の８割以上が何らかの不便さを感じ，ほとんどがこの地域社会の言語環境に戸惑いを見せている（表３．２）。さらに，ウチナーヤマトゥグチと標準日本語との違いが分かると答えた留学生は８割程度いた（表３．１）が，無意識のうちに発話に地域語の要素が入っていることを指摘された留学生が44％もいた（表３．４）。

この地域で日本語を学習していくうちに標準日本語と地域語が混交していったと考えられるが，このような留学生にたいしては日本語の学習進行にともない，共通語と地域語の適切な使い分けができるようにさせることが必要であろう。

以上が，沖縄における地域語をめぐっての留学生の言語環境と問題点である。この調査の結果によると，留学生がウチナーヤマトゥグチを使う場面もしくは話しかけられる場面が多数存在し，また，ウチナーヤマトゥグチを知らないことで不便を感じている留学生がいることから，沖縄で生活するうえで地域語を理解する必要性はかなり高いと言える。さらに，７割以上の留学生が使ってみ

〈西原町近辺在住留学生の地域語にかんする調査の結果〉

表３．１．ウチナーヤマトゥグチであることがわかるか

| 選　択　肢 | 人数（27人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| はっきりわかる | 8 | 29.6 |
| 少し違うとわかる | 13 | 48.1 |
| 全然わからない | 6 | 22.2 |

表３．２．ウチナーヤマトゥグチを知らず，困ったり不便を感じたことがあるか

| 選　択　肢 | 人数（27人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| 何度もある | 2 | 7.4 |
| 時々ある | 6 | 22.2 |
| たまにある | 15 | 55.6 |
| 全然ない | 4 | 14.8 |

表３．３．ウチナーヤマトゥグチについてどう思うか

| 選　択　肢 | 人数（27人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| 絶対話したくない | 1 | 3.7 |
| あまり話したくない | 1 | 3.7 |
| 何とも思わない | 5 | 18.5 |
| 時々使ってみたい | 11 | 40.7 |
| 是非使ってみたい | 9 | 33.3 |

表３．４．日本語にウチナーヤマトゥグチの要素があると指摘された

| 選　択　肢 | 人数（27人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| ある | 12 | 44.4 |
| ない | 15 | 55.6 |
| わからない | 0 | 0 |

表３．５．「ある」の12人に指摘されてどう感じたか

| 選　択　肢 | 人数（12人中） | 割合（%） |
|---|---|---|
| うれしかった | 6 | 50 |
| 恥ずかしかった | 0 | 0 |
| びっくりした | 1 | 8.3 |
| 特に何とも思わなかった | 5 | 41.7 |

たいと答えている（表３.３）ことから，留学生自身もその必要性を痛感しているようである。実際，留学生の６割は標準日本語に加えてウチナーヤマトゥグチを習いたいと回答している（表４）。以上の調査結果から次のことがわかった。

(1) 地域語として意識している語はそれほど多くない（11語）

(2) 地域語との接触を余儀なくされ，標準日本語との二重生活を送っている

(3) 地域語を知らないことで不便さを感じている

(4) 標準日本語に無意識のうちに地域語の要素が入っていると指摘されたことがある（44%）

表４　ウチナーヤマトゥグチを習いたいと思うか

| 選　択　肢 | 人数(27人中) | 割合（%） |
|---|---|---|
| ウチナーヤマトゥグチのほうが勉強したい | 0 | 0 |
| できるだけウチナーヤマトゥグチを勉強したい | 4 | 14.8 |
| 両方とも勉強したい | 12 | 44.4 |
| おもに標準日本語を勉強したい | 11 | 40.7 |
| 標準日本語だけを勉強したい | 0 | 0 |

## ３．日本人への調査

琉球大学留学生がよく接する沖縄県西原町周辺の日本人のウチナーヤマトゥグチの使用実態はどのようになっているであろうか。どのような場合に，どのように地域語を使い分けているのか，先の調査でとらえた地域語を中心に，その言語事象を見たのが以下である。調査概要は以下のとおりである。

調査２　日本人の地域語の使い分けと意識にかんする調査

| | |
|---|---|
| 調査目的 | 沖縄在住の主に10代後半～20代を中心とした日本人を対象に，共通語と地域語との使い分けやその表現形式，ことばにかんするイメージなどの意識を明らかにする。 |
| 被調査者 | 沖縄在住，および沖縄出身の日本人（大学生を中心に）147人<br>（性別）女55名　男92名 |
| 調査実施 | 2007年6月～7月 |
| 調査方法 | 質問紙を使用したアンケート調査 |

### 3．1．使い分けにかんする意識調査

地域語が場所によってどのように使い分けられているかについての地域語母語話者への使用意識をたずねた結果が図２である。ここに一定の傾向のようなものが見られる。つまり，地域語は会議，市役所，病院といったあらたまった場所ではあまり使われないが，家庭を中心に飲み会・パーティ，部活・サークル，教室といった気の置けない仲間が集まる場所ではかなり使われている。このような場所であれば，相手が留学生であろうと，誰であろうと，地域語が使われることを示している。

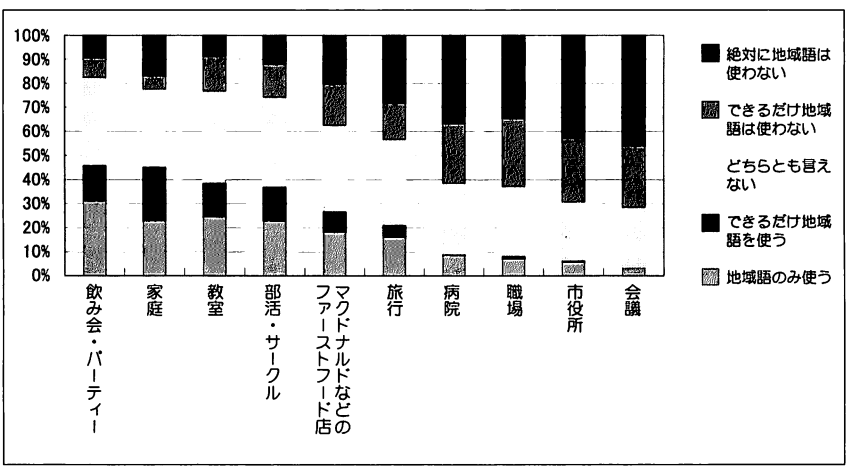


図２　場所別使い分け

次に，相手によっての使い分けを示した図３を見ると，親戚や沖縄の友達，地域語で話しかけてきた人にたいして地域語を使う傾向が高い。一方で，場所の場合と同様，上司や会社の人，先生などあらたまった相手，丁寧に接しなければならない相手にたいしては地域語を使いにくい。留学生を相手にした場合もそれと同様，地域語をあまり使わない傾向にあることがわかる。

さらに，図４は場面によっての使い分けを示したものであるが，これによると，冷静に伝えたり，距離を置きたい場面では，地域語を使わない割合が高く，やさしく説明したり，相手が困っていたりする場面では，地域語をよく使う。一方で，留学生と話す場面ではできるだけ地域語を使わない割合が高い。通常，

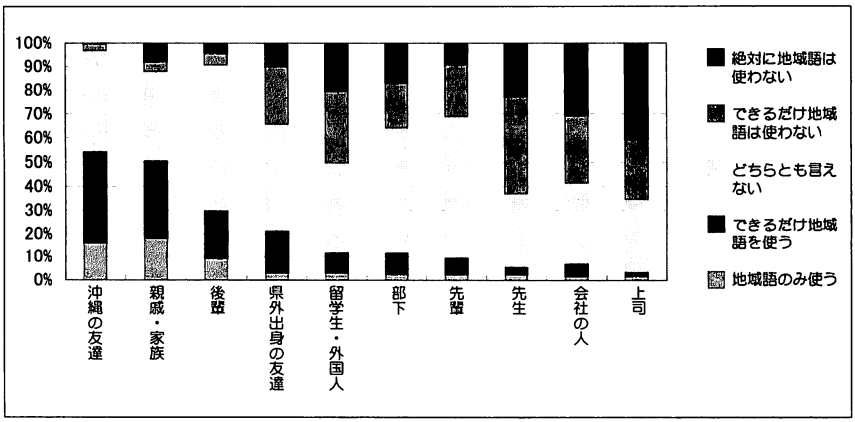


図３　相手別使い分け

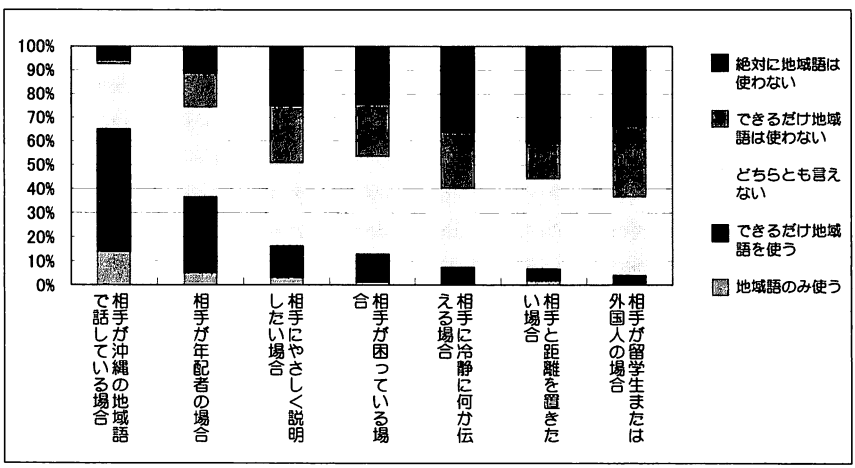


図４　場面別使い分け

日本人から見ると，留学生は「正しい日本語」を一時的に学びに来ているので，地域語は理解できないだろう，とか，地域語のような変種に接して，日本語が下手にならないように，といった配慮が働くのであろう。ただし，相手が地域語を使う場合は自分も地域語を使うという答えが多数だったことを考えると，留学生であっても，地域語で話しかければ，地域語で応える機会が増えると思われる。

このような結果から，地域語の使用領域は，親しみややさしさといった人間関係を構築する場面にあると言える。言い換えると，ウチナーヤマトゥグチを使えば，沖縄の人とより親しくなれるということである。図５の調査結果のようにほとんどの地域語話者はそのように考えている。現状では，地域語母語話者のほうに留学生にたいしてウチナーヤマトゥグチを使用することに遠慮が見られるが，留学生にとっては地域語をある程度運用できるようになれば，このような場面に積極的にかかわっていくことが可能となり，今まで以上に地域に密着した生活が可能となるだろう。そして，より充実した留学生活が送れるようになることが予想される。留学生にとって地域語の習得は，このように，多様性にたいする柔軟性を身につけ，その使い分けをとおして地域により密接にかかわりあっていくために，必要なものであるということが言えよう。

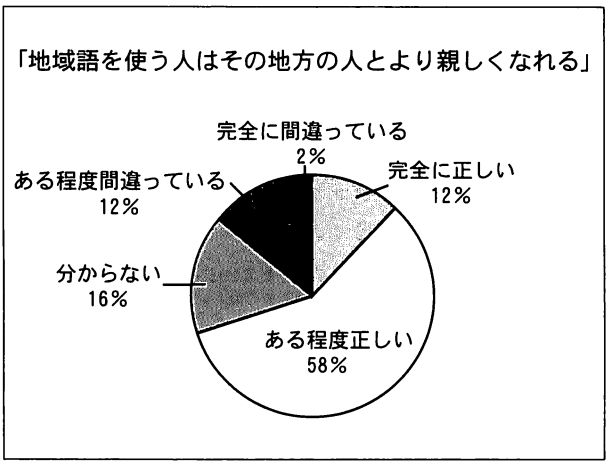


図５　地域語使用についての信念

### ３．２．日本人の地域語の使用実態の意識

実際，沖縄在住の地域語の母語話者が相手によってどのようにことばを換えているか，ということばの選択の基準を広く得るために，留学生が頻繁に接しているウチナーヤマトゥグチの上位25の語にかんして調査を行った。調査では，話す相手を①小・中・高校の同級生，②地元出身の目上の人，③県外出身の親しい友人と設定した。その結果の上位13項目を示したのが図６である。同級生に高い割合で使われる語は県外の出身者にもよく使われるが，地元の目上の人にはあまり使われないということがわかる。

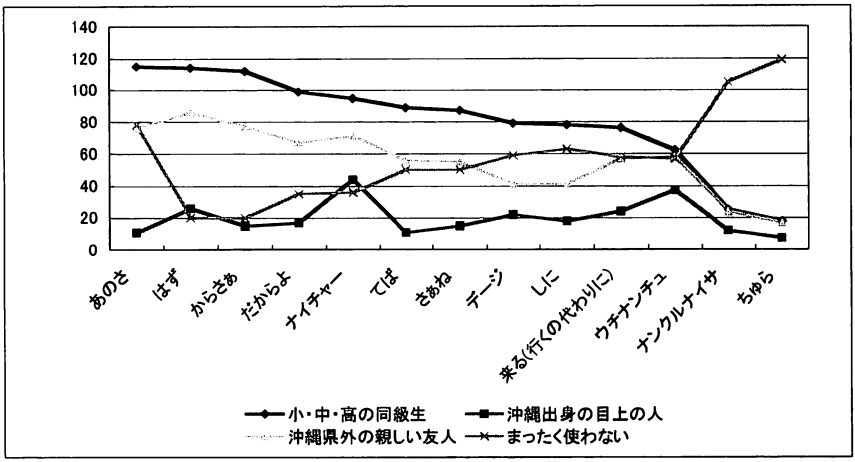


図６　話し相手別地域語使用の割合

これら13の語の，①小・中・高校の同級生と話す場合の地域語の使用頻度を次の表６にまとめてみた。このうちのいくつか，つまり「～はず」や「来る」のようなものは，標準日本語とは形は同じでも留学生の学習日本語とは明らかに意味や用法が異なる，いわゆる「気づかれない方言」（沖1999）である。地域語教育を実践する際には，表６で50％を超える頻度の高い地域語のうち，このように標準日本語と形が似ていて，意味や用法において異なるものが学習項目として必要性が高いと認められる。教材開発の際にも留意が必要である。

以上，地域語母語話者への調査結果から次のことがわかった。

(1)　地域語は気の置けない仲間が集まる場所でよく使われる

(2)　地域語は親戚や地元の友達，地域語で話しかけてきた人にたいしてよく使われる

(3)　留学生・外国人にたいしては地域語をあまり使わないようにしている

(4)　地域語母語話者の多くは「地域語を使う人はその地方の人とより親しくなれる」と考えている（70％）

(5)　同級生に高い割合で使われている語は地元出身ではない親しい友人にたいしても比較的よく使われる

表６　日本人の地域語使用の割合

| 標準日本語の語彙 | ウチナーグチ | 地域語使用の割合 |
|---|---|---|
| あのね | あのさ | 78.2% |
| ～だろう | ～はず | 77.6% |
| ～から | ～からさぁ | 76.2% |
| そうだよ、そうだね | だからよ | 67.3% |
| 本土出身の人 | ナイチャー | 64.6% |
| ～って | ～ってば | 60.5% |
| ～よね | ～さぁね | 59.2% |
| たいへん | デージ | 53.7% |
| とても | しに | 53.1% |
| 行く | 来る（「行く」の代わりに） | 51.7% |
| 沖縄出身の人 | ウチナーンチュ | 42.2% |
| なんとかなる | ナンクルナイサ | 17.0% |
| 美しい | ちゅら | 12.2% |

## ４．結

本稿では，留学生をとりまく地域語の使用状況の意識はいかなるものか，日本語学習者は地域語の教育を必要としているか否か，について検討するため，留学生と日本人への地域語にかんする意識調査を行い，その結果について考察してきた。沖縄地域の留学生をとりまく言語状況は以下の点がはっきりした。

Ｉ．留学生がよく耳にする地域語には次のようなものがある

- 「気づかれない方言」

  あのさ，～はず，来る（今から行く，の意で），～からさぁ，～ってば

- 語形が「日本語」に見られない

～さぁね，しに～，だからよ

- 普段は使用しない「お国ことば」

  ナンクルナイサ，ちゅら

Ⅱ．留学生も地域語によく接触している

- 話しかけられたことがある
- 知らなくて困ったことがある
- 親しい相手には地域語で話すべきだと考えている

Ⅲ．地域語は親密な人間関係を構築する

- あらたまった場所，相手には使われにくい

  ▶留学生・外国人にも使われにくい

- 地元出身でなくても，親しければ地域語を使用する
- 「地域語を使えば親しくなれる」と信じられている

以上のことを総合すると，留学生にも地域語の体系的な教育を提供したほうがいいということが言える。適切な言語形式の選択には，その言語形式を当該場面で選択することが適切かどうかを判断できるようになることが重要である。それには，地域語教育をとおして標準語と地域語との機能的な違いを理解し，多様性にたいして柔軟に対応できる力を身につける必要がある。ウチナーヤマトゥグチを知らないということで，言語生活に不便を強いられたり，いわゆる標準日本語の習得に支障を来たしたりするのであれば，「日本語能力の向上」を目指す留学生にとって留学自体が無益なものとなりかねない。地域語を知り，積極的に話しかけることで，沖縄の人とより親しくなれ，留学が充実したものになるはずである。

沖縄における地域語は多様であり，日々変化する生活語である。琉球王国が日本に侵略され，戦前の皇民化教育の徹底，1972年の日本復帰を経て，方言話者は急速に消滅し，共通語化が進んでいると言える。その一方で，けっして標準日本語ではない地域共通語のウチナーヤマトゥグチの話者は若者を中心に増えつつある。今回の調査でも地域語話者は図７のように地域語のイメージを情的に厚い身近なものだと考え，高く評価している。

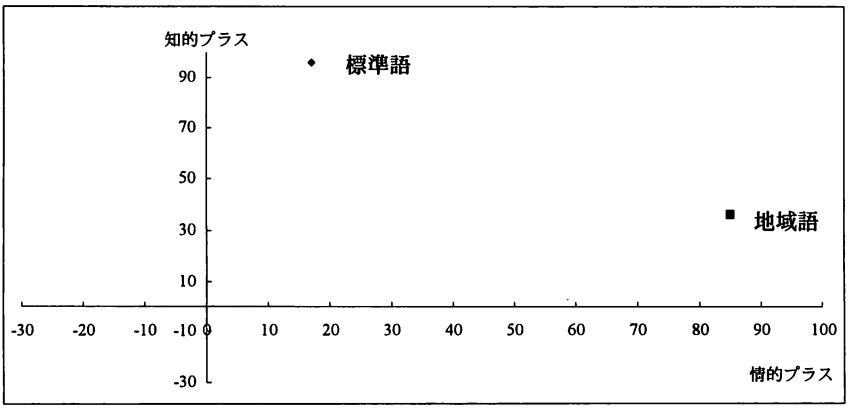


図７　標準語と地域語への評価意識

職場や地域社会などで敬語を使わなくてはならないような公式の場では標準日本語が使われるが，人間関係を円滑にし，かつ親密な関係を保つためには地域語が使われる。留学生はそのような必要性から地域語を理解したいと望み，次第になじみのある生活語となって，いつかは自然に獲得されることもあるが，大部分は習得が難しい。

地域語のなかには標準日本語との混合が見られ，話者が日本語と意識している語の中にも実はウチナーヤマトゥグチだったというものもある。留学生にとっての問題は，標準日本語を教室で習得しているところへ，なじみのない地域語が入り込み，何が標準日本語で，何が地域語かの区別ができないうちに，自分の使用する日本語へ影響を及ぼすことである。このような言語環境に鑑みると，沖縄においても留学生にたいしてウチナーヤマトゥグチを正式な学習項目として位置づけ，教材を開発し，教育していかなければならないということが言える。

謝辞

本論文の調査にあたり，2007年に琉球大学に在籍していた留学生，李雪花さん，張美英さん，呉文華さん（以上，中国），ビソネット　アレックス　チさん，コヴェル　チャールズ　マークさん，藍本謙治さん（以上，アメリカ），

李恩玉さん，邢恩眞さん（以上，韓国），張君敏さん，張筠宜さん（以上，台湾），ジッタハーンポン　パクチラーさん（タイ），山城興太さん（ボリビア）には調査票の作成，実施から集計に至るまでご協力を賜りました。心より感謝の意を表します。

## 註

(1) 留学生が挙げたものは全部で54語であったが，紙幅の都合上，ここでは30語のみを掲載する

## 参考文献

沖裕子（1999）「気がつきにくい方言」『日本語学－地域方言と社会方言－』18（13）: 156-165. 明治書院

かりまたしげひさ（2006）「沖縄若者ことば事情－琉球・クレオール日本語試論－」『日本語学』25（1）: 50-59. 明治書院

金城尚美・尚真貴子（2000）「沖縄の大学生の生活言語の実態－若者のウチナーヤマトゥグチ－」*Southern Review* 15: 25-39

真田信治（1999）「ネオ方言の実態」『日本語学－地域方言と社会方言－』18（13）: 46-51. 明治書院

真田信治（2001）『方言は絶滅するのか－自分のことばを失った日本人－』PHP研究所

高江洲頼子（1994）「ウチナーヤマトゥグチ－その音声，文法，語彙について－」『沖縄言語研究センター研究報告３那覇の方言那覇市方言記録保存調査報告書Ⅰ』沖縄言語研究センター（編）. 245-289.

永田高志（1996）『地域語の生態シリーズ琉球編－琉球で生まれた共通語－』おうふう

野田尚史（編）（2005）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

屋比久浩（1987）「ウチナーヤマトゥグチとヤマトゥウチナーグチ」『国文学解釈と鑑賞』52（7）: 119-123. 至文堂

# A case study in Okinawa of the consciousness of the regional dialect among international students


## Abstract

In this essay I undertake the following tasks in order to examine whether teaching the regional dialect to international students is useful for improving their Japanese language ability: by introducing "variation" in the Japanese language, determine what the international students think about the use of the regional dialects, and how the Japanese learners need the regional dialects.

As a result of investigation based on these questions, the following three points were elucidated:

(1) The international students hear a different varienty of not only original forms of words that are not seen in normal Japanese, but also "unnoticed dialects;" that is, same forms equivalent in Japanese in spite of differing meanings and a uses.

(2) The international students often come in contact with regional dialects.

(3) The regional dialect builds close human relations.

In consequence we suggest that the ability to understand the distinctions between the regional dialects from the "Japanese language" helps the Japanese learners improve their Japanese ability, and so teaching the regional dialect is necessary for the international students.